

高校 タイの教育提携校から生徒が来日 本校で「サイエンスフェア」を実施

本校では、タイ王国「プリンセス・チュラポーン科学高校・ベッチャブリー校」(以下、PCSHS-P)と2013年度から継続して科学と文化の交流を実施しています。

6月14日~20日の7日間、PCSHS-Pより生徒11名と教員4名が来日し、ホストクラスとなる理数キャリアコース2年生を中心に交流を行いました。ミニエッグドロップコンテスト、両校教員による授業、六義園でのネイチャービンゴ、東邦大学での実験講義などの科学交流や、国際交流委員の企画による文化交流に、英語が得意な生徒も苦手な生徒も一生懸命にコミュニケーションをとりながら参加しました。

6月17日には、最大のイベントとなる「サイエンスフェア」を実施し、午前は東京大学塩見淳一郎教授の基調講演と両校代表生徒による口頭発表、午後は来日した生徒と本校3年理数キャリアコース生徒全員によるポスターセッションを行いました。およそ180名がサイエンスフェアに参加し、どのポスターの前からも人が途切れることなく、発表者は堂々と自分の研究成果を発表していました。



サイエンスフェアでの生徒による口頭発表



文京生による日本語講座

大学 「川越リアートフェスティバル」に学生が協力・参加

7月1日、アトレ川越のイベントスペースで「川越リアートフェスティバル」(後援:川越市、小江戸川越観光協会)が開催され、人間学部人間福祉学科と心理学科の学生やBICS、大学院生が協力・参加しました。

リアート(造語)とは、障がい者アートにクリエイターや川越市民の手が加わることでより魅力的な作品を創造する新しいアートという意味です。

イベント当日は、障がい者アートを利用した着物や帯、リアートガチャ、世界一可愛い焼き芋、デザインTシャツとリアートボール、リアートお茶席(お点前披露は本学人間学部心理学科3年の児玉静さん)などの提案、夢アートランタンなどが披露されました。さらに、本学の学生2チームによるリアート製品・企画のプレゼンテーションも行われました。

また本イベントのテーマソングを手掛けた人間学部の梶原隆之教授と学生らによる楽曲披露も行われ、会場は大いに盛り上がりました。

PHOTO GALLERY フォトギャラリー



学生2チームによるコメント

重こころ(人間学部人間福祉学科3年)、
今井あかね(同1年)、藤崎彩佳(同1年)

プレゼンまでの間に何度も打ち合わせをしながら、試行錯誤をしてきましたが、本番では最善が尽くせたと思います。特に、商品化における予算などの細かな提案まで考える機会は今回が初めてで苦戦しましたが、皆で考え協力し合えたことが今回一番大きな収穫です。川越リアートフェスティバルを通して、障がい者アートについて知り、身近に感じました。今後は、より多くの方にとって身近なものとなるよう、さまざまな機関と繋がっていきけるよう行動していきたいです。

大塚康太郎(人間学部人間福祉学科3年)、
高相来斗(同)、青柳有志(同)

以前と比べ、今は障がい者への理解が少しずつ前進してきていると思いますが、それでもまだまだです。より理解され社会的障壁を取り除くためには、障がい者が輝ける立場が必要だと感じています。今回のリアート作品をきっかけに、障がい者がより輝いていける社会になってほしいと願っています。

子どもの権利を通じて「教える」そして「教わる」

宮崎捺生(外国語学部3年)

6月27日、外国語学部甲斐田万智子ゼミとして文京学院大学女子中学校の3年生3クラスを対象に、子どもの権利について授業をさせていただきました。

授業の内容は、甲斐田教授が一昨年のゼミ生と一緒に制作した子どもの権利かるたで遊びながら楽しく権利を学ぶというものです。中学生を対象にした授業は、昨年に引き続き2回目の実施でしたが、新しい試みとして生徒の皆さんが「オリジナルかるた」を作ることになりました。

初めは皆さん苦戦しているようでしたが、オリジナルかるたを共有する時間には、切実な思いが込められたメッセージを沢山聞くことができました。ゼミ生も最初は緊張していましたが、3クラスの授業を行っていく中で、生徒の皆さんのパワフルさと人懐っこい感じに、ゼミ生一同新たなエネルギーをいただきました。生徒の皆さんからも授業の良かったこととして、「かるたをすときオリジナルかるたを作るときに大学生がサポートしてくださり、子どもの権利についてわかりやすく説明してもらえた」、「子ども達の本心を素直に言えてかるたにできたこと」、「自分の意見も大切にしたいけれど、周りの人の意見も大切にしたい」という感想をいただきました。

彼女たちの情熱と学びを通じて、私たちは大きく成長できました。今後も子どもたちの権利を守り、社会に貢献する一員として活動に取り組んでいきたいと思っています。



かるたに興じる生徒たち(写真中央:宮崎さん)

GREEN SPIRITS



まがいものの知能

経営学部長・教授
藤田 邦彦

“Artificial Intelligence”(AI:人工知能)という言葉が人類史上初めて使われたのは、1956年のダートマス会議だと言われています。同会議では、当時の一流のコンピュータ科学者たちが参加し、人工知能に関する諸課題についてブレインストーミングを行ったそうで、後の人工知能研究の道筋をつけた時代を画するイベントと言えます。

ところでこの“Artificial Intelligence”という言葉ですが、元々は揶揄する意図のあった造語であることをご存知でしょうか。“artificial”を辞書で引くと、「人工的な、人造の」に引き続いて「まがいものの、偽りの」という、ネガティブな意味が並んでいます。つまり、“Artificial Intelligence”という名称は、第一義的には「人工的な知能」というニュートラルなものなのですが、「まがいものの知能」というニュアンスも含まれていたそうです。このニュアンスは、例えば“artificial sweeteners”(人工甘味料)に対する、カロリーは制限できるかもしれないが、なんとなく忌避したくなる心持を思い浮かべれば、よくご理解いただけるでしょう。

さて、昨今世間を賑わしているChatGPTやStable Diffusionといった生成系AIは、人間にしかできないと

言われていた文学や美術のような創作物を、コンピュータが創り出せるようになったということで、社会を大きく変化させるのではないかと、ひいては、AIが人間を凌駕し支配するのではないかとAI脅威論まで引き起こしています。たしかにChatGPTを実際に使ってみると、人間とチャットしているのとなんら遜色ない自然さで、もはや「まがいもの」ではない、とさえ思います。

教育に携わる者としては、生成系AIの台頭により、AIに代替可能な人材ではなく「本物の知能」を備えた人材を育成する必要が、新たに生じたこととなります。では、「本物の知能」とはなんなのか、それを大学教育の枠組みでどうやって育成するのか、ということになりますが、これについて語るには紙幅が足りないため、また別の機会にお話ししたいと思います。

ORIGINAL PROGRAM "TEPPEN FORUM" てっぺんフォーラム

大学 後輩に伝える体験談「てっぺんフォーラム」開催

ふじみ野キャンパスでは6月24日にオンライン形式で、本郷キャンパスでは7月5日に対面とオンラインのハイブリッド形式で「てっぺんフォーラム」が開催されました。上級生が下級生に向けて、さまざまな体験や想いを伝えることで、毎年多くの学生が「スイッチ・オン」し、それぞれの「てっぺん」に向けて邁進。今年も同実行委員会メンバーと発表者が協力し合い、充実したフォーラムを実現しました。以下に、受賞者の発表内容やコメントを掲載します。

本郷キャンパス

(写真左から) 【学生実行委員長】 諏訪里梨愛(経営学部3年) 【副委員長】 内藤史陽(外国語学部3年)



本郷キャンパスキャラクター「てんてん」「ばんばん」



対面での発表シーン(本郷キャンパス)



オンラインライブ配信のスタジオ風景(ふじみ野キャンパス)

ふじみ野キャンパス

【学生実行委員長】 大輪美貴(人間学部心理学科3年)



ふじみ野キャンパスキャラクター「てっぺんぎん」

スイッチ・オン賞



(写真左から) 大久保光優(経営学部2年) 長谷川瑠璃(同)柴田康介(同)平山聖也(同)

「印刷業界をhackするフィールドワーク」昨年度実施したフィールドワーク活動では、グループワークの難しさや、印刷業界の専門知識など数々のことを学びました。この経験をゼミナール活動や、就職活動に活かしていきたいです。私たちの発表から、皆さん自身のスイッチが押されるきっかけになれば幸いです。



坂井優星(経営学部2年)

「『自分改革』大学入学から現在まで」本学では、フィールドワークが盛んに行われています。そんな素晴らしい環境が学内にあるにも関わらず、参加しないのは勿体ないです。私はこれがきっかけで大きく人生・能力・モチベーションが良い方向に進進しました。今回、私の発表で皆さんも思い切って行動し、自分をスイッチONしたくなる、そんな発表を目指しました。



星まりあ(経営学部4年)

「留学から得た知見」コロナ禍で、自分がこの大学でやりたかったことがごとごとく中止になり、やっと行けた留学でした。さまざまな困難がありましたが、ポジティブに捉え自分なりに努力したこと、また人や環境にも恵まれたことで大学生活で1番思い出に残る素敵な経験をすることができました。語学留学を通して自分の価値観が変わったことを伝えました。



阿部美咲(保健医療技術学部作業療法学科3年)

作業療法学科では、課題レポートの中から優秀作品を表彰する授業があります。何度かチャレンジしましたがなかなか表彰には至りませんでした。そこで今まで趣味で続けているイラストを使ってレポートを作成してみました。結果、文章よりも理解が進み、伝わりやすい点が評価されて最優秀賞をいただくことができました。自分が好きなことでもさまざまなことに応用を試みることで、好きなことをスキルに変えられることを学びました。



宮本結衣(人間学部心理学科4年)

大学1年の時はコロナ禍ですべてがオンライン授業となり、気持ちも落ち込みがちでした。そこで自分を変えるために「SLF委員会」という学生生活の環境改善に取り組み団体に参加しました。そこで活動を通じて、自分から行動すること、人との関わりの大切さを実感しました。1年生の皆さんにお伝えしたいことは、自分を大切にしたいということ。自分を大切にすることは人によって違いますので、自分なりの方法を見つけてください。



小松優多(人間学部児童発達学科2年)

児童発達学科の中で、学生が中心となり、球技大会を企画・実施しました。感染対策、内容の決定と準備は大変でしたが、他のメンバーを巻き込みながら、柔軟に対応することによって成功に導くことができました。大学生はやりたいことを実現できる自由もありますが、反面責任もあります。自ら目標を定めて計画的に行動してみてください。



栗山昇也(保健医療技術学部理学療法学科3年)

理学療法学科の1期生から始まった伝統のダンスチームである「マッスルプロジェクト」に取り組んできました。ここで大人数をまとめることの大変さを学びました。また多くの友人との出会いにより、勉強も楽しくなりました。将来は、親しみやすい理学療法士になるという目標もできました。1年生のうちにチャレンジ精神をもって新しいことに取り組んでほしいと思います。



(写真左から) 竹川昂樹(人間学部コミュニケーション社会学科2年) 和田城太郎(同) 北野咲良(同) 北野咲良(同) 北野咲良(同)

まちラボの活動で「菓子屋ぶんぶん」という学生のアイデアを活かした店舗を地元の商店街で運営しています。ここは小学生の居場所づくりの場となっていますが、高齢者と子どもたちの交流の場を目指しています。この活動を通し、興味があることがあれば、まずやってみようという大切さを感じました。私たち3名は学科の枠を超えて活動しています。専門分野も違いますが、それぞれの強みを活かして「色は違えど、ともに行く」をモットーに活動を続けていきます。



小池彩(人間学部児童発達学科2年)

「地域連携センターBICS」でボランティア活動に取り組んでいました。子どもたちと接する機会も多かったため、分かり易い説明を心がけていました。また、児童発達学科ということもあり、保護者から子どものことで相談されることもありました。この活動を通して、自信を持つことができました。現在は、埼玉県警察本部の少年非行防止学生ボランティアに参加するなど、学外へも活動の幅を広げています。



(写真左から) 藤沼瑞希、藤井彩音(保健医療技術学部臨床検査学科4年)

本学は総合大学ですが、他の学部・学科のことを知る機会には意外に限られています。それぞれの学科には、併設校の文京学院大学女子高等学校出身者がいるので、高校時代の伝統イベントであるダンスを通じて学部・学科を超えた交流を目指しています。先生も交えたパフォーマンスの動画を紹介しながら、楽しいプレゼンとなりました。

てっぺん賞



佐藤美緒(外国語学部3年)

「挑戦して見えた自分の可能性～新たな自分の発見～」長い間憧れていたアメリカへの留学を実現させることができました。初めての海外経験でもあり、私が思っていたよりも吸収することは多く、毎日が学びの連続でした。勉強をしながらも色々なことに挑戦し、沢山の人の関わりを持って何が何よりの収穫だったと思います。その経験から皆様に挑戦の大切さをお伝えしました。そこから少しでも何かを感じて、考えていただけたら嬉しいです。



(写真左から) 甲斐田(万)ゼミ 山崎姫乃/多田有香(外国語学部4年)

「子どもの権利を広めるために私たちが行ったこと」私たちは「世界の子ども権利かるた」を使用して、子どもの権利を広める活動を行いました。学校や施設等で授業やイベントを行った結果、沢山の子ども達に子どもの権利があることを知ってもらうことができました。また、私たちもこの経験を通して、チームワークや企画力などさまざまな力をつけることができました。



吉田翔太(経営学部4年)

「難関資格への挑戦～中小企業診断士～」学生の間ではかなり知名度が低い資格かもしれませんが、私は経営コンサルタントに関する唯一の国家資格である「中小企業診断士」の試験に挑戦しました。1年生の後輩に向けて、難関資格へ挑戦した背景、合格までのプロセス、合格後に実感したことについて、綺麗事抜きに赤裸々にお伝えしました。



渡部ゼミ 藤村 芽菜(外国語学部4年)

「チームで努力し共に成長する事の大切さ」渡部ゼミナールに所属し、関東最大規模のプレゼンテーション大会に出場しました。「母乳バンクの普及」というテーマにチーム6名で取り組み、大会では「審査員賞(3位)」を受賞できました。活動中はさまざまな困難に直面しましたが、チーム全員で乗り越え、成長できました。この経験から、お互いを尊重し、共に協力する大切さを学びました。



望月楓美花(保健医療技術学部作業療法学科3年)

最初は人との関わりが苦手でしたが、大学生活を楽しむためには人脈作りが大切だと思っています。先生、先輩、アルバイト先など、人脈を築く機会はたくさんあります。勉強も友人とのグループ学習が効果的です。2年生になると勉強や実習など忙しくなってきます。大学1年生のうちに学生生活を充実しておいてください。

大学 応援メッセージ動画「世界を目指すあなたへ」

ダンス競技「プレイキン」で活躍中の大学生兼アスリート、河合来夢さん(人間学部児童発達学科4年)への応援メッセージ動画「世界を目指すあなたへ」を本学公式YouTubeチャンネルで配信中!ぜひ、ご視聴ください。



動画はコチラから



生涯学習センター秋冬期講座 一般受付開始! 多彩な講座をラインナップ

生涯学習センターの秋冬期講座(2023年10月~2024年3月)の一般受付が9月1日より開始となります。学院関係者の皆様には受講料割引の制度もあります(一部講座を除く)ので、是非ご受講いただきたく、秋冬期の講座情報をご案内いたします。秋冬期講座情報は8月25日以降、右記QRコードでご確認いただけます。

